

《正岡子規（36）の続き》その303

天涯茫茫生

列伝⑮ 下村為山

生年 一八六五（慶応元年・五・二一）  
 歿年 一九四九（昭和二十四年・七・一〇）  
 享年 84歳  
 死因 49歳時、軽い脳溢血となり、82歳時、右半身不随となる。脳卒中。

画家にして俳人。

愛媛県生れ。本名は純孝。俳句では牛伴と号した。明治15年上京して、漢学塾「紹成書院」（岡松養谷）に入り、また本多錦吉郎の洋画塾「彰技堂」に入り洋画を学ぶ。講師として小山正太郎や浅井忠が居た。

20年、小山の洋画塾「不同舎」に転じた。同門の中村不折は、生涯のライバルとなった。22年、内国勸業博覧会に出品して受賞した。松山の旧藩主久松氏が旧藩の子弟のために建てた。常盤会寄宿舎の監督であった内藤鳴雪が従兄にあたるので時々訪問していて、寄宿生であった正岡子規とも知り合いとなり、談話を交すようになった。

当時、子規は極端な洋画排斥論者であったが、中村不折とふたりで、日本画、洋画の優

劣を論じて、遂に子規に洋画の眼を開かせたのである。

不折の洋行に際し、子規は『墨汁一滴』に長文の送別の文を載せ、不折・為山の比較論を展開している。

「不折君と為山氏は同じ小山門下の人で互に相識る仲なるが、いづれも一家の見識を具へ立派なる腕を持ちたる事とて、自ら競争者の地位にあるが如く思はる。よし当人は競争するつもりに非るも、傍にある余ら常に両者を比較して評する傾向あり。しかも二人の画も性質も、挙動も容貌も、一々正反對を示したるは、殊に比較上興味を感じる所以なり。

二人の優劣は固より容易に言うべからざるも、互に一長一短ありて甲越対陣的の好敵手たるは疑ふべきにあらず。先ずその容貌をいはんに為山氏は丈高く面長く、全体にすらりとしたるに反し、不折君は丈低く面鬼の如く、髯ぼうぼうとして全体に強き方なり。為山氏は善き衣、善き駒下駄を著け、金が儲かれば直に費したるに反して、不折君は粗衣粗食の極端にも耐へ、なるべく質素を旨として、少しにても臨時の収入あればこれを貯蓄し置くなり。君が赤貧洗ふが如き中より身を起して、独力を以て住居と画室と建築し、それより後二年ならずして洋行を思ひ立ち、しかも他人の力を借らざるに至ては君が勤儉の結果に驚かざるを得ず。為山氏は余り議論を好まず、普通の談話すら声低くして聞き取りがた

きほどなるに反して、不折君は議論は勿論、普通の談話も声高く明瞭なり。為山氏は感情の人にして、不折君は理屈の人なり。為山氏は不精なる方にて、不折君は勉強家の随一なり。為山氏は酒も飲み煙草も飲む。不折君は酒も飲まず煙草も飲まず。凡そこれ等の性質嗜好の相違はさる事ながら、その相違が尽く画の上にあらはるるに至つて益々興味を感じるなり。

為山氏の画は巧緻精微、不折君の画は雅樸雄健。為山氏は熟慮して後に始めて筆を下し、不折君はいきなりに筆を下して縦横に画きまはす。為山氏は一草一木を画きて画となす事も少からねど、不折君は寸大の紙にもなほ山水村落の情景を描く癖あり。同一のものを写生するに、為山氏のは実物よりもやや丈高く画き、不折君のは実物よりもやや丈低く画く。為山氏は何か画いても自分の氣に入らねば直に捨てて顧みず、不折君は一旦画き初めし者はどうでもかうでも仕上げてしまふ。為山氏は調子に乗って画く、調子乗らざればいつまでも画かず、不折君は初より終まで孜孜として怠らずに画く。これらの相異枚挙に違あらず。（二人相似の点もなきに非ず）（読みやすくするため、多少、句読点をほどくした）

長文を引用したが、為山と不折を論じて、これほど詳細で精緻を極めたものはない。子規の分析的な頭脳を知るに足る。